

第8回伝道フォーラム（3月27日）

標記フォーラムを天理大学研究棟第1会議室で開催した。テーマは、「アメリカに渡った天理教：移民・戦争・青年の力」。アメリカに渡り天理教を伝えてきた先人のアメリカ布教への情熱とその布教の実を手がかりに、アメリカにおける天理教伝道の特徴を明らかにし、現在から将来へとつながる議論を目指した。

第1講では、尾上貴行研究員が「アメリカ伝道の開始と展開」と題し、アメリカの初期伝道の様子を概観し、2代真柱のアメリカ巡教がアメリカの教友に力を与えたこと、先駆者たちの布教、教会系統や教会本部の動きなど、戦前を3つに区分して紹介した。第2講では、山倉明弘天理大学国際部長が「信仰者の戦時強制収容体験が教えるもの」と題して、アメリカ政府による日系人戦時強制収容体験・収容計画の特徴に注目し、なかでも、在米天理教布教師が強制収容されたことの意味についてトランスナショナルな視点を導入して論じ、さらに天理教伝道と移民・移住についてその特徴を指摘した。第3講では飯降政彦本部長が「天理教青年会ハワイ大会」と題し、当時青年会本部委員長としてハワイを訪問し、当地の青年会員たちとの話などから、1974年の「ハワイ大会」開催を決意するに至った経緯やその思いについて語った。また、飯降委員長とともにハワイ大会に携わった深谷忠一前おやさと研究所長などが当時の様子を伝えた。（堀内記）



第302回研究報告会（4月24日）

信仰生活における聖地巡礼とその意義

シン ジョンヒョン  
陳 宗炫（京都府立大学）

どの宗教伝統においても、信仰者にとって聖地への巡礼は重要な意味をもっている。本発表では、韓国における天理教の場合を取り上げ、「ぢば」への信仰とその特徴について、宗教学的に考察した。

天理教では、1893年から韓国への布教が行われた。しかし、第二次世界大戦後、日本人すべては日本へ引き揚げられることを余儀なくされた。こうした中にも、韓国における天理教の信仰は、韓国人の信者たちによって保持され継承されてきた。とりわけ、日韓の国交が断絶していた時期には、韓国における天理教の信者たちは「ぢば」へ帰ることができなかった。

こうした状況において、韓国の天理教信者たちが信仰生活の

中で、いかに「ぢば」への信仰を保持していったのかについて、フィールドワークにもとづいて検討した。

華嚴専宗国際学術シンポジウムに参加

金子 昭

4月27日～29日の3日間、私は台湾・台北市の華嚴専宗学院で開催された第6回華嚴専宗国際学術シンポジウム（華嚴専宗国際学術研討會）に参加し、研究発表を行った。このシンポジウムには昨年に引き続いて2回目の参加になる。

華嚴専宗学院は、中国華嚴宗の流れを汲む財団法人台北市華嚴蓮社の教育事業の一環として1975年に設立された。華嚴宗門に基づいて、主に出家修行者（大半は尼僧）を養成するとともに、広く宗門学の普及・啓発を行う専門的教育・研究機関である。なお、華嚴蓮社は教育事業の他に、弘法事業、文化事業、慈善事業も展開している。国際学術シンポジウムは、台湾本土や中国など主に中国語圏の研究者を招待して2012年より毎年開催されてきた。そのため発表言語はすべて中国語である。

初日（27日）は午前には開会式の後、台湾仏教史の専門家である關正宗・佛光大学助理教授による基調講演があり、午後からシンポジウムの部が始まった。私は2日目（28日）の第6セッションにて「現代における『原人論』の哲学的人間学的意義（從哲學人類學來看《原人論》的現代性意義）」という演題で発表した。『原人論』は華嚴宗第五祖の圭峰宗密（780～841）による独創的な仏教の人間学の著作で、発表内容はこれを現代の哲学的人間学や比較思想の文脈で検討するというものである。

シンポジウムの部は3日目（29日）も行われ、最後に華嚴専宗学院の賢度院長（尼僧）をも交えて総合討論が行われた。3日間の日程で全11セッションが生まれ、総勢30名が華嚴経および華嚴宗に関する研究発表を行った。日本人参加者は私一人であったが、多くの学術的知見を得ることができて、とても意義深いものであった。

『グローバル天理』  
合本のご案内

2010年から2016年に出版された『グローバル天理』の合本を頒布しています。これは各1年分（12号分）を1冊にまとめ、簡易製本したものです（頒価は200円）。

合本はご注文を受けて製本しておりますので、研究所事務室にお越しの際は、必ず事前に電話、FAX、もしくはEメールでご連絡ください。また、郵送による頒布も行っております。